以松插門戸而余以賢木換之故云、とみえたるを始とすべし、此ほかには年中行事繪に、土佐光長が筆にあらはせるがごとし、歌には堀河院百首顯季卿除夜の歌に、門松をいとなみたつる云々とみゆるぞはじめなるべき、さて是はすゑ〳〵の賤がいとなみに、さならはせるわざにて、もとよりうるはしきおほやけ事にはあらず、されば正しき書どもにはみえぬなるべし、今も榊をたつること、邊鄙などに稀々あり、いにしとし、詮丈が旅行せし時、東海道金谷島田の驛、又藤枝のあたりにさきみをさせる家どもみえたりき、上に引ける無題詩の自注に、近世云々とあるを思へば、延久承保の頃より、民の家々には、專ら正月の祝事として、立はじめけるにやあらん、さて下樣のみもてあつかへることのよしは、世諺問答の說、かつ左に擧たる古歌どもに、賤が門松云々とおほくよめるにて、そのおもむきたしかにさられたり、たゞしふるくは松のみにて、竹をたてそふるは、いづれの世よりといふことをさらず、世諺問答に、竹をもたつるよし見えたれば、應永の頃には、竹をもたてたる事勿論なり、されば、いたく下りての世の事とおぼゆ、さてこの月家毎の門に注連繩を引かくる事は、神代に天照大神をとゞめ奉るとて、天の岩屋戸に布刀玉の命、尻久米繩をもて引わたしたるを始にて、是より押うつりては、只神の前に引わたして、祭りあがむることゝなれり、今は春陽の氣をむかへて、門戸を祭るが爲なるべし、又西土にも禮記月令集說曰、戸者人所出入、司之有神、此神是陽氣在戸之內、春陽氣出故祭之などみえ、荆楚歲時記にも、元旦索に松柏をむすび、畫雞を門戸に付て、疫鬼をさくるよしみゆ、されば只門戸を祭るのみにあらで、是らをも思ひよせたるにや、さて皇國にてさめなばを門戸にかくる事は、延喜承平などの頃より、すでにあることゝ見えたり、下にひける土佐日記元日の條をみてさられたり、そも〳〵門松をたつること、ふるくよりさま〳〵にいひきたれど、いづれも後人のおしはかりにて、いふにもたらず、○略中武家に行はるゝ事は、鎌倉室町兩將軍家には所見なし、天正の前後羽尾記、嘉良記隨